平成30年度研究助成 【音楽振興部門】より

昭和前期におけるラジオ放送と「日本文化」の形成－音楽番組を中心に

小田原短期大学　講師
三枝　まり

昭和前期は、ラジオ放送というメディアによって音楽の大量伝達が可能となり、一方では音楽の大衆化を促すとともに、それまでごく一部の人しか聴くことのなかった多種多様な音楽文化の普及拡大に大きく貢献し、ラジオは日本の近代化において画期的な役割を担いました。放送開始当初から、邦楽のみならず洋楽も積極的に放送され、当時にあってはなかなか身近に接する機会の少なかった西洋音楽も、全国的に受容されるようになりました。実際、７月12日の本放送開始日の放送記録を見ると、政治家 近衞文麿の弟で今日のNHK交響楽団を創設した近衞秀麿の指揮で、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」や山田耕筰の「JOAK行進曲」、サン＝サーンスの《クリスマスオラトリオ》の一部などが放送されていることが分かります（図１参照）。

しかし洋楽は人気があったから放送されたわけでなく、むしろ放送の中止を要望する声も数多く届きました。実際、少し時代をくだった1932年度において、琵琶の放送時間が409時間で積極希望が94％、消極希望が６％であったのに対し、管弦楽は742時間も放送されたにもかかわらず、積極希望が21％で消極希望が79％でした[1]。聴取者の反対を乗り越えても放送されたのは、東京の初代放送部長服部愿夫が、洋楽が将来の日本音楽を建設する上に不可欠であるとの考えを持っていたからでした。このような考えは教育界に共有されており、この頃の職業別希望を見ると、「教育ニ従事スル者」のみ、洋楽の積極希望が消極希望を約３倍上回っています[2]。洋楽優遇は謝金面でも如実に表れ、洋楽に使われた予算の方が邦楽より高額でした[3]。

このように、ラジオ放送は必ずしも当時の日本人の嗜好を反映したものではなく、放送開始時から日本の音楽文化向上を目指す指導精神を持って企画されていました。それはよい意味でも悪い意味でも色々な形で作用し、たとえば太

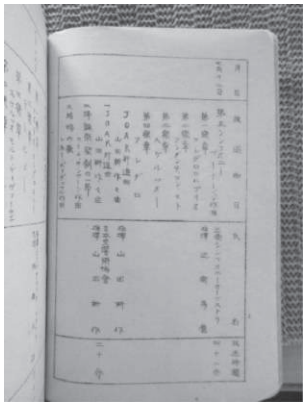

図１　1925年７月12日の放送番組『洋楽　大正十四年七月－十二月』（NHK放送博物館所蔵）

平洋戦争中は、音楽放送は国家の目的に合わせて戦う日本の文化建設のため機能することが求められることになります。

一方、1925（大正14）年の放送開始当初のラジオ普及率は2.1％以下で、受信機台数は25万台を上回るにすぎず、聴取者は限定的でした[4)]。しかし、昭和７（1932）年に普及率は11.1％となり初めて１割を越え、太平洋戦争が始まる昭和16（1941）年には45.8％、終戦の前年には50.4％と戦前の最高に達し、音楽受容層も拡大します。ラジオを通して人々は手軽に様々な種類の音楽に接し、演奏家は演奏の場が増え、作曲家は国家の政策を背景に自作の発表の機会が増えました。たとえば映画の名曲や軍歌を自らアレンジしたピアニストの和田肇は、放送局に「和田肇氏のピアノは大変結構です」、「和田肇氏のピアノがありまして非常に嬉しかった」などの声が多く寄せられ人気を博しましたし[5)]、作曲家も「いくら人手があっても足りない有様である」と評される状況でした[6)]。つまり、放送というメディアは、聴衆だけではなく演奏家や作曲家に対しても、非常に大きな影響を及ぼし、放送を通した日本の音楽文化が形成されてきたと言えるでしょう。そして、その背景にはいつも、その時々の社会との関係がありました。

私の研究は、このように急速に普及した戦前のラジオ放送に焦点を当て、放送がどのように音楽文化の形成に貢献したのかを実証的に明らかにすることを目的としています。勝ち戦だと瀬戸口藤吉作曲の《軍艦行進曲》が流れ、玉砕の時には信時潔作曲の《海行かば》が流れる、などさまざまなエピソードが残されていますが、これまで、昭和前期の音楽放送について、データとしてはまったく明らかにされてきませんでした。

１．調査対象資料の紹介

本研究で主な調査対象としている資料は、音楽放送について番組名、内容、出演者、放送日時などが記された手書きの『洋楽放送記録』と『放送番組確定表』です（図２参照）。『洋楽放送記録』は、記録が残されている番組が限定さ

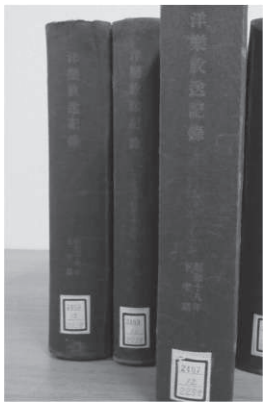

図２　『洋楽放送記録』

れますが、「空襲下取止メ」や「(空襲警報発令中ノタメ発令区域外ニノミ送出ス)」など、放送直前の変更が反映されています。一方、『放送番組確定表』は番組の種別に関わらず網羅的に記録されていますが、前述のとおり番組表に記載された情報がそのまま実際に放送された内容とは限りません。そこで、その他の放送関係の雑誌や年鑑、業務統計要覧、日本放送協會報、当時放送に関係した人たちの回想録、さらには投書日報やアナウンス原稿、台本なども参照し、事実を慎重に精査しながら研究を進めています。

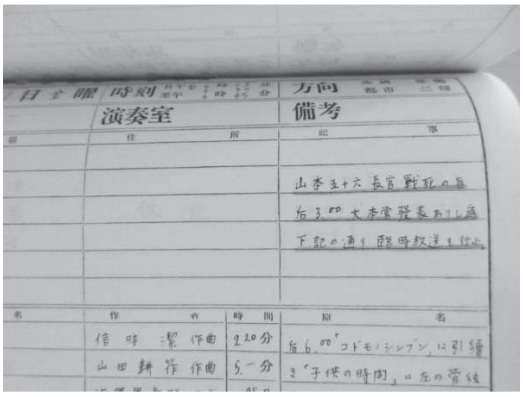

図３　『洋楽放送記録』(1943年５月21日) より抜粋

２.『洋楽放送記録』から一部紹介

ここで太平洋戦争下、1943（昭和18）年５月21日の番組を一つご紹介したいと思います。この日は午後３時に大本営発表があり、山本五十六が戦死したことが国民に知らされました。すでに、４月19日に、山本五十六が戦死していたことは昭和天皇にも報告されていますから、ひと月以上経った後での発表です[7)]。このニュースを受け、放送番組に急遽変更が生じます。『洋楽放送記録』には、「山本五十六長官戦死の旨 后3.00大本営発表ありし為 下記の通り臨時放送を行ふ」と書き込まれ（図３参照)、当初、午後６時台に放送予定であった滝廉太郎の《花》や清水保雄の《マニラの風景》は、小澤征爾を育てた斎藤秀雄の指揮、東京交響楽團の演奏による、信時潔作曲《海ゆかば》、山田耕筰作曲《聯合艦隊行進曲》、海軍軍楽隊作曲《太平洋行進曲》、瀬戸口藤吉作曲《軍艦行進曲》、ベートーヴェン作曲《交響曲第三番「英雄」》から第二楽章に変更されています。「英雄」の第二楽章は《葬送行進曲》ですが、クラシック音楽がこのような機会に16分30秒も放送されていたことは特筆すべきことです。この頃の投書日報によると、「ベエートーヴェンの豪宏壮麗、シューベルトの清純無垢の音楽こそ軍なる慰樂を超越して銃後国民生活に益する所大なりと思ひます。今後何卒この様な音楽をお願ひします（豊中市)」というような意見も寄せられており、西洋音楽の受容が拡大している様子がうかがえ

ます。実際、1943（昭和18）年６月の番組聴取率月報を見ると、午後８時台の管弦楽の聴取率は都市部郡部ともに37％で、歌謡曲の70％前後と比較すれば低いですが、着実に聴取者は増えていったと言えるでしょう。

３．研究の展望

文化というものは一日で大きく変わるものではありません。戦前のラジオ放送には、政府が主導する音楽、浪花節や流行歌など大衆が好む音楽があった一方、聴取率も気にせずに「良いものを良いものと放送して行」くという方針に基づく音楽がありました[8)]。戦前に見られた音楽文化の萌芽は、時間をかけて戦後に開花していきます。その変化の過程と、ラジオが日本の近代化において担った役割を、音楽放送のデータと資料から引続き読み解いていきたいと思っています。

謝辞

本研究に対して研究助成を賜りました一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団に心より感謝申し上げます。また、資料調査に際して、NHK放送博物館に多大なご協力をいただいています。この場をお借りして謝意を表します。

参考文献

１）逓信省 日本放送協会『第一回 全国ラヂオ調査報告』社団法人日本放送協会, 1934年, p.91.
２）逓信省 日本放送協会『第一回 全国ラヂオ調査報告』社団法人日本放送協会, 1934年, pp. 416 − 435.
３）「放送事項別回数・時間及謝金調書（放送事項別回数・時間及び謝金調書 昭和２～３年度」（NHK 放送博物館所蔵）.
４）日本放送協会編『20世紀放送文化史 下』, 2001年, p. 532.
５）『投書日報　昭和16年12月分』（日本放送協会業務局企画部）.
６）有坂愛彦「音楽放送」日本放送協会『放送研究』第２巻第12号, 1942年, p. 81.
７）『昭和天皇実録 第九 自昭和十八年 − 至昭和二十年』, pp. 72, 74, 97, 101, 102.
８）沖不可止「戦時教育音楽放送の問題」日本放送協会『放送研究』第２巻第６号, 1942年, pp. 72 − 75.